

# 石碑

いし  
ぶみ

が伝える

災害の記憶と

警告鐘

けい  
しょう

三重県教育委員会

大地震動

津波

大地震ふりて

津波流

大地震

経塚之前迄浪到也





# 三重県の災害碑

江戸時代に起こった災害の記録

何百年も前からたたずんでいる石碑<sup>いしぶみ</sup>には、何百年も前にこの地で生きていた人びとが未来に記した言葉が刻まれています。

地震や津波等の災害をきっかけとして建てられた石碑を、ここでは「災害碑<sup>さいがいひ</sup>」と呼んでいきます。そこには、その地で起こった災害によって、老若男女、何十人、何百人という方が亡くなったこと、そして、災害が起こった時にどうすればよいのかが記されています。大変な目に遭った人びとは、後の世に生きる子どもや孫のために、思いを込めて石碑を建てました。災害碑は、今を生きる私たちみんなに発せられた、愛情あふれる伝言板なのです。

災害碑に記されたおもな内容

- ① 災害発生地点を示すこと
- ② 災害死亡者を供養すること
- ③ 被害状況を記録すること
- ④ 後世へのメッセージを記すこと



災害碑に共通するのは、後の世の人のため、人が目にする場所に建てられていることです。三重県内では、江戸時代の宝永4年(1707)に発生した宝永地震津波に伴って見られるようになります。災害碑は、江戸時代以降に建てられるようになったといえます。

## 災害碑の分布

三重県内で確認されている江戸時代以前の災害碑は、いずれも地震に関係しています。洪水や台風に関する災害碑は今のところ未確認です。志摩半島<sup>くまのなだえんがんぶ</sup>から熊野灘沿岸部に分布している17基は全て津波被害と関係しています。伊賀市にある2基は江戸時代の嘉永7(安政元)年に発生した直下型地震、桑名市にある1基は嘉永7(安政元)年から安政2年にかけて発生した地震で亡くなった方の供養のためのものです。

地震被害のなかでも、津波による被害が大きかった熊野灘沿岸部で集中的に建てられていることがわかります。

### ? 「石碑」と「災害碑」・「津波碑」の関係は?

災害碑は石碑の一種です。そして、それぞれの災害碑には「大乘経塔」や「津波碑」という固有の呼び方もあります。このリーフレットでは、災害碑それぞれの個性を尊重して、固有の呼び方もあわせて使っていきます。

※このリーフレットでは、江戸時代に発生した地震、津波被害を記した、明治時代までに建てられた石碑を紹介しています。桑名市多度町下野代(徳蓮寺)、南伊勢町神津佐(墓地)、志摩市阿児町(妙音寺)の石碑は、明治時代に建てられたものですが、いずれも記憶が生々しい段階で建てられたと考えられるため、この中に含めました。





# 三重県の歴史地震

過去の地震からわかること

東海沖・東南海沖・南海沖

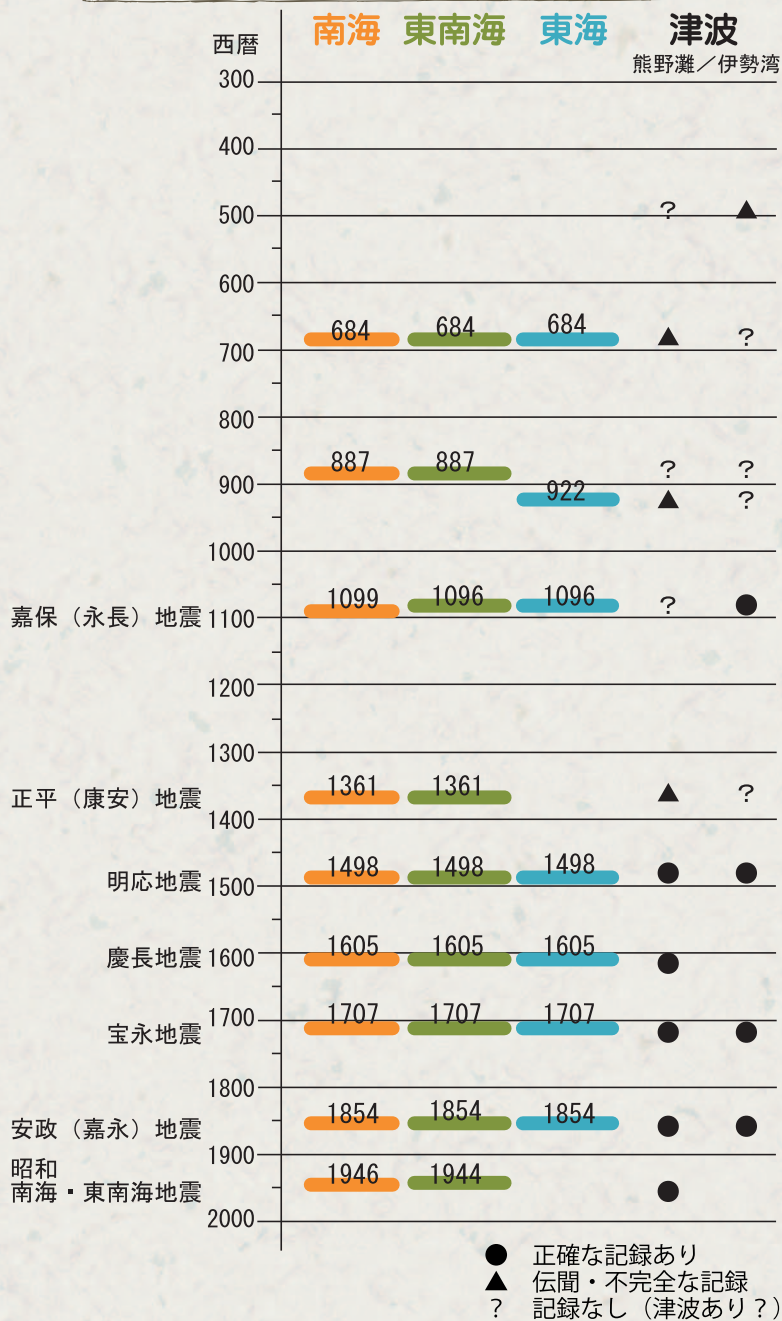
伊勢湾・熊野灘沿岸部では、歴史的に見ても多くの地震が発生し被害を受けています。

過去の記録によってわかる地震のことを「歴史地震」といいます。三重県への影響が大きい、津波を発生させる太平洋プレートを震源とする歴史地震について、これまでの記録をもとに年表で表してみました。

太平洋プレートを震源とする地震のうち、三重県に影響を及ぼす震源地は大きくわけて、東海沖・東南海沖・南海沖の3つがあります。なかでも東海沖・東南海沖を震源とする地震が発生した際に大きな被害が起こる可能性があります。

この年表から、太平洋プレートを震源とする大地震は100～200年の間隔で発生していること、東海沖・東南海沖・南海沖の3つの震源地は、多少の前後はあっても連動して発生していることがわかります。

## 南海・東南海トラフ等を震源とした 三重県内のおもな歴史地震



### 明応地震

西暦1498年(明応7年)8月25日に発生した津波を伴う地震が有名ですが、その3年ほど前から各地で規模の大きな地震が発生していたようです。津波は伊勢湾や熊野灘にも押し寄せ、志摩半島各地や大湊(伊勢市)に大きな被害をもたらしました。言い伝えでは、安濃津(津市)もこの時に大被害を受け、浜名湖(静岡県)が決壊して海とつながったのもこの地震によるものとされています。

### 宝永地震

西暦1707年(宝永4年)に発生した続発地震で、10月4日に発生した津波を伴う地震が有名です。今の三重県域にも、熊野灘沿岸部を中心に大きな津波被害が出ました。津波から約1ヶ月後、富士山が大噴火し、山頂の南東にある「宝永山」ができました。

### 安政地震 安政伊賀上野地震

西暦1854年(嘉永7年、安政元年)には、6月15日に伊賀上野で直下型地震、11月4日に東南海トラフを震源とする津波を伴う地震、同5日に南海トラフを震源とする地震が発生しました。いずれも大きな被害をもたらしました。



# 清岩庵の津波碑

後世への警鐘

鳥羽市浦村にある清岩庵の境内に置かれている自然石に記された石碑です。嘉永7年（安政元年）11月4日早朝に起きた地震により、お昼前に津波が起きて寺の門まで到達したこと、被害の状況、後世への注意喚起が記されています。

地震から4年後に住職の文鳳によって文章が書かれ、谷川又右エ門が世話人となって村中安全のために建てられたことがわかります。

石碑は、向かって左側の門柱裏にあります



裏面



正面



刻まれた文字

正面

嘉永七年甲寅十一月四日  
 天氣陰慘卯時地大震巳時  
 滄海潮湧白浪如山須臾至  
 前村中央直衝山腹入寺門  
 者三寸許比時民屋頽裂財  
 物盡亡男女老少只以免死  
 為幸或構草舍或菅覆而待  
 震之定殆一月餘其辛苦豈  
 可言哉諺曰震動之後海嘯  
 心至令果遭是災因記大略  
 以示將來者

安政五戊午年五月  
 現住文鳳起焉

裏面

為村中安全

世話人

谷川又右エ門

刻まれた内容

嘉永七年十一月四日、卯の刻（早朝）に大地震が起こり、巳の刻（昼前）に津波が起きて、あつという間に前の村を襲い寺の門に三寸（約十センチ）ほど達した。この時、民家は壊れ財は流された。老若男女はただ命あるのを幸いとしました。粗末な家でほぼ一か月過ぎ、その辛苦は言葉にできない。諺に「揺れた後に海がうそづく」とある。この災害の概略を記して将来に示す。

清岩庵の門は、標高5 mほどの高さにあります。この門まで達した津波は、それより低い位置にある民家に大きな被害をもたらしました。本浦漁業協同組合が所蔵する「洪浪帳」という文書には、本浦では死者は出なかったものの、56軒の家屋が流出したことが記されています。



大蔵寺の災害碑と土塀。  
石碑の裏面に書かれた、津波で壊れた瓦を使った土塀にあたる  
と考えられます



大蔵寺は志摩市志摩町越賀の高台にあり、門の脇に石碑が建っています。安政地震津波について、越賀の被害をくわしく記し、後の世への警鐘とするだけでなく、当時の越賀村以外で起こったことも記録した、とても興味深い石碑です。



刻まれた文字

正面下部

\*表面・裏面ともに長文のため、句読点を付けました

津波流倒記

一、維持嘉永七安政改元甲寅十一月四日辰下刻、大地震ニ付道路披破れ浜ハ毀れ井戸水濁減驚怖之内暫時津波満寄、無程潮干去常ノ不見底瀬相見、汐干凡三四尋有之所相顕哉否、末申方より如山、高サ三丈計大浪湧出、如矢当村江押還、波先五・六丁程込入、御高札場及普門寺相倒、在家式拾壹軒、納屋拾四ヶ所、土蔵二ヶ所流失、又二拾四軒、土蔵六ヶ所大潰并破損、常舞台ハ神祇の加護にや無事、浜辺筋田地砂入、大荒二町三反八畝拾七歩、畑三反拾四歩、船数四拾壹艘流失、同破船、網類百二拾帖、溺死三人、誠に肝をひやし、親子尋問なく家財打捨、着儘我先と高所へ逃去、音声四方に響、喧事難記、毎夜野宿、小屋住居、其時只奉仰ニ神仏御威光而已、翌卯四月迄震動あれ共、時日を不記、向後若地震あらハ、火消置、財宝迷す、老人子供ハ勿論、喰物持参の上、早々高所江退、夜中、猶更油断なく、欲に迷ハク身命危しと平生心得へし、依而此事実紙冊に残さんと欲すれ共、朽易故、今愚昧之乱毫を染て石に勒し末世の一助に備んとす、恐ハ後世人、予微志の拙を誇し給ん事を願す、爰に誌置くもの也

安政二乙卯五月日

小川良忠謹建焉

正面頂部

一 仏成道  
二 観見法界  
三 草木国土  
四 悉皆成仏

裏面

一、逢津波極難洩者江 御殿様より米・金・衣類等被為 御下置候事  
一、宝永四亥十月四日未刻地震津波にて家屋敷田畑砂入大荒聞伝、当安政元寅年迄星霜百四拾八年成也  
一、鳥羽御場内外塀不残流失、藤中之郷ハ勿論、本町、片町迄汐込入、厚被為有御心配候御事  
一、去丑寅兩年、異国亞米利加船相州浦賀并大坂川口迄渡来ニ付、諸国大騒動、当村方も宿割、兵糧、明松、草鞋、釘等迄用意手配候事  
一、津浪にて打碎瓦少々拾ひ集、末世疑惑なき証拠として此土塀築構置也  
一、本州神嶋村漁舟拾七艘、当浦入津之所、津浪ニ而拾六艘破船、溺死拾四人有之、御役所様江御届之上、当村江葬候事

本施主 浅原伝三郎

刻まれた内容

地震のときは火を消し、財産に執着せず食べ物を持って高台に逃げることや、紙は朽ちるので石碑に記したこと等が記されています。「欲に迷ったら命が危ないと心得よ」とは重い言葉です。裏面には、鳥羽藩主からの災害支援助物資が届いた事への感謝、鳥羽城と城下町の被害、安政地震津波で壊れた家屋の瓦を集め地震の戒めに大蔵寺の土塀を造ったこと、神島(鳥羽市)の船と乗組員が被災し、被害者を越賀で葬ったことのほか、地震一年前に起こった「黒船来航」のことも記されています。ちなみに、大坂(大阪湾)に黒船が来たのは安政地震が発生したのと同じ嘉永七年九月で、これはアメリカ力船ではなくロシア船のことです。

安政地震津波

大蔵寺の津波碑

欲に迷わば身命危うし

黒船来航の  
記事も!

越賀にある郷藏

江戸時代の村有財産庫で、年貢米や、有事の際の必要物資等が蓄えられていました。



# 最明寺の大乗経塔

宝永地震津波

南伊勢町贄浦の最明寺門前には、2基の災害碑があります。このうち、「大乗経」と書かれたのが宝永地震津波に伴う石碑です。宝永地震津波では、贄浦で60名もの犠牲者が出ました。

石碑の正面に「大乗経」とあるのは、犠牲者を弔うために、ここにお経（大乗経）を埋めたことを意味しています。石碑には、「地震の後には津波が来る。後の世のためにここに記す」という記述や、「この石碑（経塚）まで津波が来た」と書かれています。300年以上前の先人が未来の人に向けたメッセージです。



2基の石碑が最明寺の門前に並んでいます

右面



裏面



左面



正面



刻まれた文字

正面  
大乗経

左面  
宝永四丁亥冬十月四日

午刻大地震之後高汐漲起當浦家不殘流失而男女六十人計溺死也令此

裏面

経塚之所迄浪到也後來若有大地震者必可知高浪来也為後鑑記焉

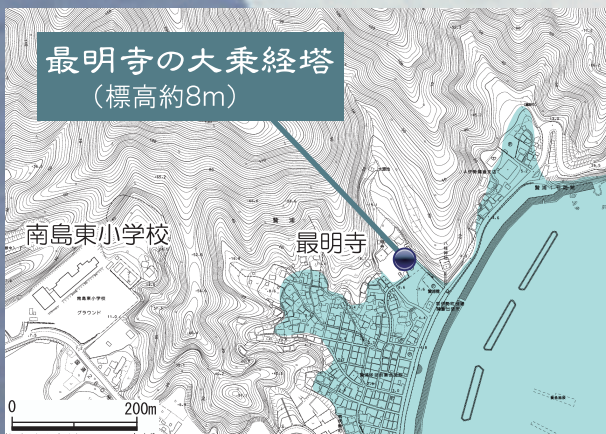
右面

為溺死亡靈菩提

刻まれた内容

大乗経

宝永四年の冬十月四日の午の刻（午後〇時頃）、大地震の後に高潮（津波）が襲いかかり、当浦（贄浦）の家屋が残さず流された。また男女六十人ばかりが溺死した。この経塚の場所まで津波が押し寄せた。もし大地震が起これば、必ず高波（津波）が来ると知りおきなさい。後の世のために記す。溺死した故人の菩提のため。



最明寺の大乗経塔  
（標高約8m）

石碑の位置と内容から推測される宝永地震津波の浸水域

三重県市町総合事務組合所管  
2006 三重県共有デジタル地図  
（承認番号：令和元年10月9日付三総合地第142号）



# 最明寺の供養塔

危機管理意識をつなぐ

南伊勢町贄浦、最明寺門前にあるもう1基の災害碑は、安政地震津波に伴う石碑です。正面には「供養塔」と書かれています。

安政地震津波の溺死者は、3名です。この津波でも尊い命が奪われましたが、宝永地震津波溺死者が60名であったことに比べると、大幅に少なくなっています。この石碑は、安政地震津波で亡くなった方々の三回忌にあわせ、2つの津波被害の供養のために作られたのです。最明寺の住職が石碑の文章を作成し、法要のまとめ役が、当時の贄浦庄屋（村のまとめ役）と胆煎（庄屋の補佐役）でした。宝永地震津波碑と同様に、後世のため、地震後の津波に注意を喚起しています。

宝永地震津波の苦しい経験を忘れることなく伝えてきたことが、安政地震津波の碑文からわかります。災害碑は、地域や人びとの危機管理意識を保つうえで、大きな効果を発揮していたのです。

裏面



右面



左面



正面



刻まれた文字

正面  
供養塔

左面

宝永四年丁亥十月四日有突浪村人溺死者六十人餘今年值百五十年忌依之拜請隣刹之老尊宿等於前濱修大施餓鬼以營追福村中善男女亦施淨財助其供養者也

右面

嘉永七年寅十一月四日巳刻大地震又有突浪溺死者三人民家六十余流失破損不知数也大地震則有突浪古今相同後人宜知之也

裏面

現住小比丘  
宥芳記承  
安政三丙辰十月  
庄屋

西川甚左衛門  
肝煎  
當役 中村吉郎兵衛  
同 楠崎吉蔵

刻まれた内容

石碑の正面には「供養塔」の文字、右面には嘉永七年（安政元年）に発生した被害が記されています。ここでは、津波が「突浪」と書かれ、溺死者三名、民家流出六十軒あまりの被害を記しています。左面には宝永地震津波発生から百五十年忌の供養を行ったことが、右面には造られた日付や関係者が記されています。



# 佛光寺の津波碑

宝永地震津波・安政地震津波

佛光寺は、北牟婁郡紀北町長島にあります。境内山門の脇に2基の石碑があり、いずれも正面に「津波流死塔」と刻まれています。

向かって右側 **石碑①** が宝永地震津波、左側 **石碑②** が安政（嘉永）地震津波のものです。

いずれの石碑も、建てた人や年代が記されていませんが、それぞれの地震津波被害からほどなく建てられたと考えられます。



## 刻まれた文字

### 石碑①

経 塚  
津波流死塔

### 左面

宝永四丁亥年十月四日未ノ上刻大地震直二津浪入在中不残流失其上五百餘人流死仕候自今以後大地震時者覚悟可有事

### 石碑②

経 塚  
津波流死塔

### 左面

嘉永七甲寅年六月十四日丑の刻大地震夫より十一月迄震動数度同四日巳の刻大地震直津流浪家四百八十軒余汐入三百十軒候流死貳拾三人二および則宝永度の塚有之通自今已後大地震の時ハ覚悟可有事

## 刻まれた内容

佛光寺の津波流死塔は江戸時代から有名で、寛政八年（一七九六）に当地を訪れた紀行作家の橋南谿が記した『西遊記続編』に、石碑①と考えられる紹介がなされています。宝永地震津波被害を記した石碑①には、地震が発生してすぐに津波が押し寄せたこと、長島（の建物等）が残さず流され、五百人もの人が亡くなったことが記されています。安政地震津波被害を記した石碑②では、六月から十一月までの続発地震であること、十一月四日の大地震では直後に津波があったこと、家屋は四百八十軒ほど流され、二十三人の人が亡くなったことが記されています。いずれも「大地震の時は覚悟あるべき」と記し、緊張感が伝わってきます。



石碑① 側面



石碑② 側面



# 馬越墓地三界萬靈碑

被害を記録し被害者を弔う

この石碑は、尾鷲市街地から馬越峠に至る世界遺産熊野参詣道沿いにあります。

「三界萬靈碑」とは、この世のあらゆる霊を供養することを目的として建てられるもので、宝永4年10月4日に起きた地震による山崩れと津波の規模や被害の状況、石碑を建てた主旨が記されています。

石碑は墓地の一角にあり、災害で亡くなった方を供養する目的もあったと考えられます。



右面



裏面



左面



正面



### 刻まれた文字

\*長文のため、句読点を付けました

#### 正面

經 三界萬靈塚

#### 左面

宝永丁亥冬十月初四日、南海路地大震、有山邑山崩壓邑者、有水郷波起漂流村落者、殊尾鷲邑者開水道於左右、前面海廣背後山高、故怒濤自三面競起而迴避無方、頃尅之間

#### 裏面

而男女老幼溺死者千有餘人、居民靡有号遺屍積如山矣、嗚呼痛哉無数生靈乃作泉下之人、于茲良源岨上人憐無依之鬼興無縁之慈、立塔普度、由是乞銘於余、同為銘曰、大地震動、山崩海揚、怒濤壓邑、迴避

#### 右面

無方、男女老幼、流漂大津、遽然不返見者斷腸、崑老立塔、普度群凶、願依此德、同登覺場

正徳癸巳孟冬四日

良源絶崑立石  
永泉師心謹誌

### 刻まれた内容

宝永四年十月四日、南海路地が大きく振動し、山村では山崩れが起り村を呑み込み、海岸部では津波が町を呑み込んだ。特に尾鷲村は水道が左右に開けて、前面の海が広く、背後の山が高いため、津波が三面より流れ込んで回避する場所がなく、あつという間に老若男女の溺死者が千人を超えた。死体が山のように積もり、痛ましくも無数の方が亡くなった。私(絶岩)はこれを記録すべきだと考え、塔(供養碑)を建てた。

今の尾鷲市野地町にあった良源寺の絶岩が造立を発願し、永泉寺(今の紀北町船津)の師心が文章を作成したことが記されています。銘の年記は正徳三年十月四日、七回忌に合わせ完成されたと考えられます。



# 光明寺の津波碑

地震の時は津波が来ると心得るべし

光明寺は、熊野市遊木町の高台にあります。境内の一角に高さ約90cmの円柱形の石碑があり、宝永地震津波、安政（嘉永）地震津波による被害が記されています。

この石碑には、建てた人や年代が記されていませんが、安政地震津波の被害について記したうえで、寺が管理する「過去帳」に詳細が記されていると刻んでいますので、安政地震からそれほど年月を経ない頃に建てられたと考えられます。



刻まれた文字

昔宝永四亥十月四日大地震つ浪有以来百五十年  
嘉永七寅十一月四日大地震つ浪一丈五尺上り  
氏神社初人家四十五軒流失流死七人有此後  
大地震之時つ浪有と心得初八平地に出ゆり終  
次第たかき所にげ可申事くわしき八過去帳ニ有

刻まれた内容

宝永地震津波から百五十年、嘉永七年十一月四日に発生した大地震によって、一丈五尺（約四・五メートル）の津波が押し寄せ、氏神社のほか民家四十五軒が流失し、七名の犠牲者が出たことが記されています。

四行目からは未来への警鐘です。「大地震の時は津波があると心得て、揺れ始めは平地に出て、揺れがおさまり次第高い所に逃げなさい」と書かれています。被災時の具体的な行動方法が記されており、注目できます。文章中にある過去帳は光明寺に保管されていましたが、明治十三年（一八八〇）の火災で残念ながら消失してしまいました。



手前の建物が光明寺で、ここに石碑があります



# 服部川の法華経塔

震災の被害者を悼む



伊賀市市街地の北東に、大きな石碑が1基あります。元々は服部川の河川敷に建っていたものですが、倒壊の危険があったため、平成13年に近隣の公園に移設されました。

この石碑は、安政伊賀上野地震で亡くなった595名を供養するため建てられました。正面に「法華経」とあるのは、ここにお経（法華経）が納めてあることを示しており、石碑を移設する際に行われた発掘調査では、実際に納められたお経がみつけられました。石碑からは、藩主が被害をあわれみ、寺院や地域の人びとが震災被害者の供養を行ったようすが伝わってきます。

右面



裏面



左面

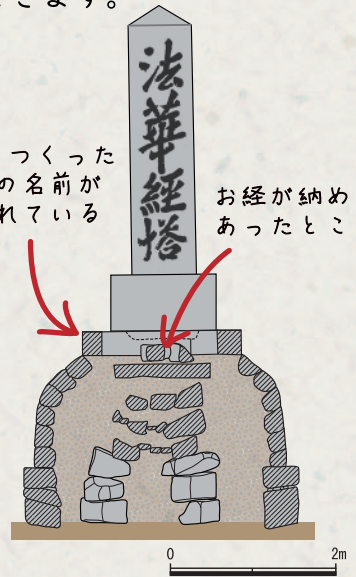


正面



石碑をつくった石工の名前が刻まれている

お経が納められていたところ



### 刻まれた内容

嘉永七年六月十五日の早朝に大地震が起こり、死者五九五人におよぶ大被害を受けた。その被害を受けた人々の様子をあわれんだ藩主は、国の人々へお金や米を与え、様々な宗派の寺院により死者の供養を行った。そのあとに、法華経八巻を納めた塔を建て、安政二年に一周忌が営まれた。

### 刻まれた文字

#### 正面

#### 左面

嘉永七年六月十五日の暁大地震によりて家たふれ横死者五百九十五人におよるを  
國君深くこれをあはれひ給ひて国民へあまたの金米を  
たまはり且死者追善のため同年七月國內諸宗の寺院に

#### 裏面

おほせて此所において大施餓鬼を行はせたまへりその法会と君恩のありかたきを群参の諸人と共に感涙の袖をしぼりてなき魂も世にある人もかくまでの深き恵にうかはぬはなしと  
なんよめり猶其跡に法華経八巻をおさめ塔をたて、供養をなし一周忌營者也

#### 右面

安政二乙卯六月

功德主上行寺義孝院日長敬白

同志

廣岡文四郎保興  
森川六右衛門吉比

橋井亦兵衛定祥  
廣岡文治郎保忠

同志補助菊輪茂助好之  
福田彦平保廣

波埜(野) 田 石工 勇助

#### 下段

波埜(野) 田 石工 勇助

服部川河岸に建っていた石碑は、現在、近くの公園に移設されています



移設前の法華経塔  
写真：伊賀市教育委員会提供





あたしか  
熊野市新鹿町

民家の石垣中央に、少し大きめの石材が見えます。ここに「津波留」と刻まれています。



こうか  
志摩市阿児町甲賀

石碑は妙音寺の北端、人目につく道端に建てられています。



こしか  
志摩市志摩町越賀

大蔵寺の門前にたたずむ石碑。



うらむら  
鳥羽市浦村町

坂を上った電柱の脇に、柵で囲まれた石碑があります。「津波塩先棒杭」と刻まれており、津波がここまで来たことを示しています。